
食道楽王妃

坂田火魯志

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

食道楽王妃

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

カトリーヌドゥメディチはフランス王妃となってフランスの食事のあまりもの貧しさに嘆いた、そうして故郷から呼び寄せた料理人達に腕を振るわせて。奇しくもフランス料理のはじまりとなったお話を書かせてもらいました。

第一章

食道楽王妃

カトリーヌ・ド・メディチは名前の通りメディチ家出身である。フィレンツェに君臨するこの家は飽食の街と呼ばれたこの街の中でもとりわけ美食の家だった。

一族の持病は痛風であった、この病気が美食によるところが大きいのは知られている、美食でなければビールが原因だ。

それだけにカトリーヌも美食家だった、その彼女がフランス王アンリ二世の妃としてフランスに入ったのだが。

カトリーヌはフランスの宮廷料理を見てまずは絶句した、そしてその後で夫であるアンリに対して問い詰めた。

「王よ、これは一体何でしょうか」

「何かとは？」

「ですから宮廷のこの料理はです」

巨大な肉を無造作に焼いただけのものやぐたくたになるまで煮たシチュー、果物があったり質の悪いワインがあったりだ。パンも悪い。カトリーヌはそうした宮廷の料理を見て王に問うたのだ。

「何なのですか」

「？何か不都合があるか」

「あるどころではありません」

カトリーヌは口を尖らせて王に答えた。

「どれもこれも食べられるものではありません」

「馬鹿な、この国で一番の馳走ばかりだぞ」

王は驚きを隠せない顔でカトリーヌに返した。

「どれもこれも」

「これ等がご馳走だというのですか」

「そうだが」

「こうしたものはフィレンツェではまともな者ならば誰も口にしません」

カトリーヌは不愉快さを隠さず王に答えた。

「それこそ」

「ではそなたはどうしたものを食べているのだ」

「それはこれからお見せします」

「これからか」

「はい、厨房に私がフィレンツェから連れて来た者達を入れます」

こう王に答えた。

「そうしますので」

「ふむ、ではだ」

王もカトリーヌのその話を聞いて考える顔になり応えた。

「見せてもらおうか」

「はい、是非」

カトリーヌは王に返した、そしてこの日は宮廷に出されたものには見向きもせずフィレンツェから呼んだ者達に作らせた料理を食べた、そのうえでだ。

その料理を食べつつだ、彼女は周りの者達に言った。

「よいですか」

「はい、私達がですね」

「フィレンツェの料理を見せるのです」

「フランスの宮廷において」

「そうです、食材もです」

料理以外の話もだ、カトリーヌはした。

「取り寄せなさい、いいですね」

「我々がいいと思うものをですね」

「自在に」

「調味料もです」

食材だけでなくというのだ。

「香辛料も同じです」

「胡椒等もですね」

「遠慮なく使い」

「そしてですね」

「そのうえで、ですね」

「貴方達の腕を見せるのです」

カトリーヌは二又のフォークを使い料理を口に中に入れていた、
そうしつづ周りの者達にこうも言ったのだった。

「そしてこれもです」

「フォークもですね」

「そちらもですね」

「これの使い方もです」

そちらもというのだ。

第二章

「伝えましょう」

「この国はまだ手摺みですからね」

「何とも野蛮ですね」

「まだ手摺みで食べているとは」

「どうにも」

「そこもあらためましょう、とかくです」

王の前での不機嫌な顔をそのままにだ、カトリーヌはこうも言った。

「この国の料理はなっていないません」

「あまりにも酷いですね」

「宮廷であれとは」

彼等もカトリーヌと共にいて見ていた、それで主と同じ顔になっ
て言うのだった。

「まことに酷いです」

「作法もよくありませんが」

「何しろ料理がです」

「あまりにも酷いです」

「このままでは耐えられません」

カトリーヌは本音も述べた。

「ですから宮廷では貴方達の腕を見せてもらいます」

「はい、是非共」

「そうさせて頂きます」

「我々の料理の腕をお見せしましょう」

「この国でも」

シェフ達はカトリーヌに強い声で応えた、彼女はフィレンツェで
の美食をフランスでも楽しむつもりで連れて来たが彼女はこのこと
によかったと心から思っていた、そしてだった。

早速だ、カトリーヌは彼等に作らせた料理を宮廷に出した。する
とだった。

王も廷臣達もその料理を見てだ、まずはだった。

目を見張ってだ、そのうえでだった。お互いを見合わしてそれか
らカトリーヌに問うた。

「あの、これは」

「これは一体」

「どういったものですか？」

「見たことがないですが」

「余もだ」

王も言う、端正で王らしい威厳を備えた顔で言うのだった。

「この様な料理はだ」

「そうでしょう、しかしです」

カトリーヌは王にも廷臣達にも誇らしげな顔で応えた。

「これがフィレンツェの料理なのです」

「これがか」

「そうです」

王にその顔で答えた。

「香辛料と香草を効かし程よく焼いた鴨肉にです」

「鴨をか」

「はい」

その通りだというのだ。

「そしてシチューもですが」

「人参や蕪にか」

「ミルクを入れただけでなく」

その白いシチューも見せて話した。

「肉に味付けもしています」

「やはり香辛料でか」

「そうです、味付けは全体的に変えています」

「そうか、何処まで煮たのではないのか」

「そんなことはしません」

カトリー又は王にむっとした顔で返した。

「そしてパンの焼き方もです」

「柔らかそうだな」

「そうもしたので」

「味が違うか」

「はい、そちらもです。あとジャムも用意してチーズもフィレンツェから持ってきたものを出しました」

そうしたものも変えたというのだ。

第三章

「そうしたものでパンをお召し上がり下さい」

「ではな」

「あの、王妃様」

貴族の一人がカトリーヌにおずおずとした態度で問うてきた。

「宜しいでしょうか」

「何でしょうか」

「料理に黒いものが入っていますが」

見たこともない豪勢な料理を指し示しての言葉だった。

「これは」

「それはトリュフです」

「トリュフとは」

「山で採れる稀少なものでして」

「山で、ですか」

「そうです、美味しいです」

こう貴族に話した。

「食べてみて下さい」

「左様ですか」

「そして食後に果物以外にもです」

カトリーヌはそちらの話もした。

「ワインに果物の汁を入れて割ったものや氷菓も出します」

「氷菓？」

「それは何ですか？」

氷菓と聞いてだ、王も貴族達もだ。

誰もが怪訝な顔になってだ、そのうえでカトリーヌに問い返した。

「聞いたこともないですが」

「それは」

「はい、砂糖とミルクと卵を合わせて作った菓子を冷やして固めたものです」

カトリーヌは氷菓のことも話した。

「これが非常に美味しいので」

「だからか」

「その氷菓もですか」

「食べる」

「食後に」

「そうです、そうして下さい」

是非にという返事だった。

「そちらも」

「わかった」

王が一同を代表して頷いた、そのうえで食べようとするが。

カトリーヌはフォークも出して彼等にそちらも紹介した。

「手で食べるのではなくこれに刺してお口の中に入れて食べて下さい」

「何と、それを使ってか」

「そうです」

カトリーヌはこのことでもだ、王に答えた。

「そうしてです」

「そうして食べるのか」

「手で食べると指が汚れますね」

「それはそうだが」

「そうした食べ方はもうフィレンツェではしません」

進んでいるこの街ではというのだ、カトリーヌはこのことについて

でも強調した。

「ですから」

「フォークを使ってか」

「切った料理をお食べ下さい」

「ではな」

王はまた一同を代表して応えた、こうしてだった。

フランスの宮廷にいる者達はカトリーヌが紹介した食べ方でカトリーヌが出させた料理を食べた、するとだった。

食べたこともない味にだ、彼等は驚嘆した。

「何だこの味は」

「野菜も肉も違う」

「魚も」

「何という味だ」

「香辛料の使い方が違う」

「こうした香草の使い方があったのか」

「何と美味しい」

手慣れない動作でフォークを使って食べつつ言うのだった。

「このトリュフも何という味だ」

「この様な美味しいものがあったのか」

「しかも果汁で割ったワインの実に美味しいことだ」

「氷菓の味は何とも言えない」

「この様なものがあったのか」

「これ程美味しいものが」

「これがフィレンツェの料理です」

カトリーヌは王妃の座から周りの者達に話した、王も含めて。

第四章

「パンも違いましたね」

「この様なパンははじめてだった」

王がカトリーヌの横から答えた。

「まさにな」

「そうですね」

「ジャムもチーズもな」

「全てですね」

「バターも違った」

それまでがというのだ。

「まさかここまでとはな」

「ではこれからです」

「妃がだな」

「他の料理も紹介させて頂きます」

「うむ、頼む」

王は目を輝かせてだった、カトリーヌに応えた。そして実際にだった。

カトリーヌは日々フィレンツェの料理と作法を宮廷で紹介した、王も廷臣達も誰もがその料理に舌鼓を打った。

カトリーヌ自身もだ、満足した顔で彼女のフィレンツェから連れて来た者達に話した。

「全く、何とかですね」

「よくなりましたね」

「宮廷の料理の状況が」

「フィレンツェの様になりましたね」

「あの様な料理ではです」

当初のそれはというのだ、フランスの宮廷の。

「到底食べられません」

「はい、我々もです」

「あれはないと思いました」

「噂には聞いていましたが」

「あれ程までとは」

周りの者達も言うのだった。

「あまりにも酷かったです」

「あれではお妃様のお口に合いません」

「我々から見てもでは」

「あまりにも」

「貴方達を連れて来てよかったです」

カトリーヌはしみじみとして述べた。

「ではこれから」

「はい、美味しいものを出していきましょう」

「フィレンツェの様に」

「贅を尽くした」

「それを出していきましょう」

「そうです、美食あってこそです」

カトリーヌは赤いワインにオレンジを絞った汁を入れたそれを口に
しつづ言った。

「人は生きられるのですか」

「その通りです、では」

「今宵もですね」

「微笑をお出ししますか」

「当然です」

「一も二もない言葉だった。」

「さもないと私も生きていられません」

「あの様な料理を口にしては」

「到底ですね」

「そうです、ですから」

それ故にというのだ。

「そうしていきます、いいですね」

「では今宵も贅を尽くして」

「そうした料理をお出ししますので」

「お楽しみ下さい」

「それでは」

カトリーヌは強い声で頷いた、そしてだった。

実際にこの夜も美食を楽しんだ、王や廷臣達に紹介しつつ。カトリーヌは来る日も来る日もそうして過ごした。

それが気付けばだった、何時しか。

フランスの宮廷にフィレンツェからもたらされた洗練された美食が定着した、それがフランス料理となった。

一人の王妃の舌がこの国の料理を作った、若し彼女がフランスに來なかったらフランス料理は存在しなかったかも知れない、こう思うと実に面白い。そう思い書き残すことにした、サン＝バルテルミの虐殺を引き起こしてしまい陰謀家でもあったカトリーヌ＝ド＝メディチだが一つの国の料理の基礎をもたらした。そう思うと歴史そして人の世は実に面白いものである。

·
1
3

2
0
1
7
·
2

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~20380

食道楽王妃

2017年09月30日 22時52分発行